



## 日本におけるコシジロイソヒヨドリの写真を伴う

### 3 例目の記録で雌の初記録となる観察

平岡考<sup>1,\*</sup>・永井真理子<sup>2</sup>・永井次郎<sup>2</sup>

1. 〒 270-1145 千葉県我孫子市高野山 115 公益財団法人山階鳥類研究所

2. 〒 509-0126 岐阜県各務原市鵜沼東町

コシジロイソヒヨドリ *Monticola saxatilis* は、ヨーロッパ中南部から北アフリカ、西アジア、中央アジアを経て、シベリア東南部、モンゴル、内モンゴルを含む中国の北部等に繁殖分布し、アフリカ中部で越冬するヒタキ科の鳥類で、亜種は認められていない (Mayr & Paynter 1964, Dickinson & Christidis 2014, Clement & Hathway 2000)。本種は、「日本鳥類目録改訂第7版」(日本鳥学会 2012)では「検討中の種・亜種」に掲載されており、日本に自然分布すると認められた種を収録した Part A には含まれていなかった。しかし、現在編集が進んでいる同目録の改訂第8版では新規に掲載される見通しである。すなわち、2021年2月18日に、改訂第8版のための「属以下の分類(和名、学名)、および新規掲載種、検討種についての意見」を募集する目的で公開された「日本鳥類目録改訂に向けた第一回パブリックコメント」(オンライン)では、「8版掲載判断」= A (7版以降に査読付き雑誌に観察記録等が掲載され、8版に掲載することと判断された種)として、新規掲載種のリストに掲載された。掲載判断の理由として、「日高ほか(2017)により学術報告されており、自然渡来の可能性についても考察されている」と述べられている。本種は同リストで引用された報告も含め、これまでに写真の証拠のある観察記録2例と、写真の証拠のない観

察記録1例が知られているのみで(表1)(池長ほか 2012, 2014, 川田 1982a, b, 五百沢ほか 2000, 川路ほか 2002, 日高ほか 2017), ごく稀な迷鳥と考えられ、日本における渡来、分布状況に関する基礎情報を収集することが重要である。

筆者のうち2人、永井真理子と永井次郎は、2020年7月2日、長野県諏訪市四賀の霧ヶ峰において、コシジロイソヒヨドリの雌成鳥を1羽発見し、観察ならびに撮影した(図1)。これは写真の証拠のある本種の記録としては日本で3例目のものであり、また雌が観察された最初の記録である。本種の日本における生息状況についての重要な新知見と考えられるので以下に報告する。

霧ヶ峰は、主峰車山(1,925 m)を中心として標高約1,500 m以上、約3,000 haの広さをもつ緩やかな地形の、いわゆる高原である(霧ヶ峰の自然地形・湿原・気象・歴史 オンライン)。植生は、採草地として戦後まで維持されてきた半自然草原、放牧や牧草栽培などによる草原と、高層湿原、樹叢と呼ばれる落葉広葉樹林からなる(長野県環境保全研究所 2006)。モズ *Lanius bucephalus*, ビンズイ *Anthus hodgsoni* のような灌木の点する草原や林縁性の野鳥や、ホオアカ *Emberiza fucata*, ノビタキ *Saxicola torquatus* 等の草原性の野鳥が繁殖する(堀田ほ

2023年3月1日受理

キーワード: コシジロイソヒヨドリ, 霧ヶ峰, 迷行, 雌の日本初記録鳥

\*: hiraoka@yamashina.or.jp

か 2006).

観察当日は快晴で、午前 9 時 30 分頃、長野県諏訪市四賀霧ヶ峰グライダー場より約 250 m 東へ移動した草地の杭（北緯 36 度 5 分 東経 138 度 10 分付近、標高 1,645 m）に止まっている本個体を発見し、観察、撮影を行った。杭から付近の電線に移動したあと、付近約 50 m の範囲内を移動したが、モズが近くに出現したため地上に降り、その後飛び去った。発見から飛び去って見失うまで約 30 分で、その後、付近を探したが見つかることができなかった。また観察者らは現地に 1 日だけ滞在したので、翌日以降の観察はできなかった。

現地での観察ならびに写真の検討から、この個体の特徴は次の通りだった。体の大きさは、モズより少し大きく感じられた。ツグミ類に似た体型の鳥で尾が短く、嘴の形はツグミ類に似て細長く、全体に黒く見えるが、下嘴基部は鈍い橙色。頭頂は灰褐色で、写真からは微細な斑紋があるようにも見えるが判然としない。耳羽も含め顔の下半分から喉の側面は頭頂より淡く、細い暗色羽縁による鱗模様があり、体下面につながる。真横から頭部を見た画像を見ると、淡色の眉斑や暗色の過眼線のあるパターンにはなっていない。喉の中央は白い。体の上面は、頭頂から引き続き灰褐色で、明瞭な濃淡の斑は見えない。後ろから見ると、頭頂は灰色がかり、たたんだ翼に向かって濃い褐色になる。上背の中央部に不明瞭な白っぽい淡色部が見える。たたんだ翼は暗褐色で、明瞭な濃淡のパターンは見えない。大雨覆の先端にごく細い白線があるように見える羽もある。体下面は、遠目にはわずかに橙色がかった淡灰褐色に見え、橙色は体の後方にゆくにつれ多少濃くなる。下面全体に細い暗色羽縁による鱗模様があり、脇の後方にかけては胸よりやや粗になる。下尾筒には斑はなく、橙色がかかる。腰の色彩は不明。上尾筒の

色彩も全体としては不明だが、外側の上尾筒の先端部に当たる部分は橙色に見える。たたんだ尾は中央が褐色で外側は橙色。虹彩は暗色、脚は黒っぽく、跗蹠はやや褐色がかかる。鳴き声は聞かれなかった。

上記の特徴を検討した結果、この個体はコシジロイソヒヨドリの雌成鳥と判断された。以下に検討の内容を記す。

モズより少し大きく見えるツグミ類に似た体型の鳥で、尾が短く、嘴はツグミ類の典型的な形に似て細長く、色は全体に暗色、顔の下半分から喉の側面を経て体下面まで鱗模様があること、体の下面は橙色がかり、下尾筒は無斑で橙色がかかること、たたんだ尾は中央が褐色で外側は橙色であること、虹彩は暗色で、脚も黒っぽいこと等は、コシジロイソヒヨドリの雌または幼鳥を強く示唆していると考えられた (Clement & Hathway 2000, Svensson *et al.* 2009)。

モズより少し大きく見えたという印象については、全長だけの比較では、モズの全長は 20cm (高野 2015)、コシジロイソヒヨドリの全長は 19cm (高野 2015) あるいは 17.5 ~ 21cm (Shirihai & Svensson 2018) であり、一見おかしいと感じられる。しかし、尾長はそれぞれ、モズが 80 ~ 97 mm (小林 1983)、コシジロイソヒヨドリが雄 57 ~ 67 mm、雌 55 ~ 62 mm (Shirihai & Svensson 2018) で、モズの尾のほうが遥かに長いことから、観察してモズより少し大きく見えたという印象はコシジロイソヒヨドリの大きさと矛盾しないと考えられた。

本個体の頭頂から上面がほぼ一様な灰褐色に見える点は、Clement & Hathway (2000) に述べられている、“各羽の先端に淡色の羽縁があり、その内側に暗色の「亜終端線」(サブターミナルバンド) があって、はっきりした鱗模様がある”という記述と、一見すると整合性がないように考えられた。これについては、年齢と

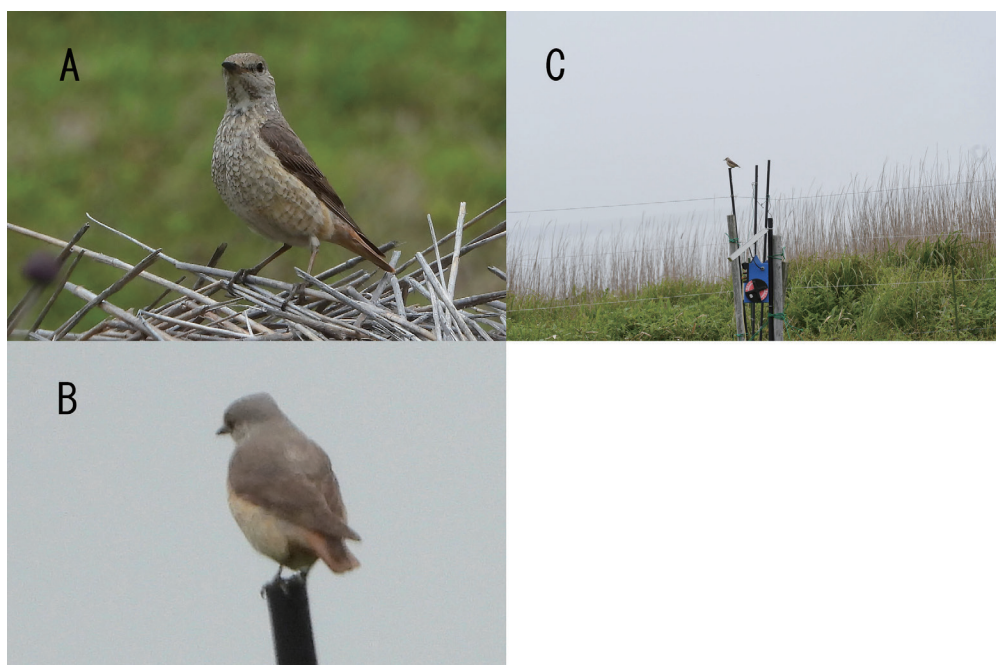


図 1. 長野県諏訪市の霧ヶ峰で撮影されたコシジロイソヒヨドリ. (A) 斜め前からと (B) 後ろからの姿. (C) 草地の杭に止まる. 2020 年 7 月 2 日撮影.

Fig. 1. Common Rock Thrush *Monticola saxatilis* photographed in Kirigamine Plateau in Suwa Shi, Nagano Prefecture on 2 July 2020. (A) Diagonal anterior view. (B) Posterior view. (C) Perched on a pole in the grassy field.

性別の検討の結果、コシジロイソヒヨドリの成鳥雌であれば問題ないと判断できた。以下、本個体の年齢と性別について述べる。

本種の繁殖期は 4 月末から 7 月である (Clement & Hathway 2000)。7 月 2 日という観察日から、その年生まれの幼鳥であれば巣立ちから間もなく、体羽の摩耗はほとんどない時期であり、頭部と体上面にも明瞭な鱗模様があるはずである。本個体ではそれがなく、ことから、この年生まれの幼鳥である可能性は除外できる。このため本個体は成鳥または第一回夏羽であると考えられる、そうだとすると、観察日を考慮すれば、頭部と体羽、それと小雨覆と中雨覆の内側のいくつかその他を換羽する

(Cramp 1988) 春の換羽から時間が経っており、摩耗して鱗模様が不明瞭になったと考えることで矛盾なく説明がつくと考えられた。実際に、Shirihai & Svensson (2018) に掲載されている、4 月の成鳥雌という、頭頂や体上面の鱗模様が相当不明瞭な写真 (p. 274, 上右) から判断して、本個体の特徴は、このような個体の羽毛の摩耗がこのまま進むことで得られる、摩耗した成鳥夏羽と考えられた。なお、第一回夏羽は、初列風切、初列雨覆、一部の大羽覆が摩耗した幼羽であることで識別できることもあるが、多くの例で成鳥夏羽との識別は難しいとされる (Shirihai & Svensson 2018)。本個体の写真を検討したがこの点についてははっきりした

判断はできなかった。

本個体の性について検討する。本種は雄夏羽では頭部から上背が淡青色である (Svensson *et al.* 2009)。また冬羽への換羽時期は 8 月下旬以降 (Clement & Hathway 2000) なので、観察時期から可能性はきわめて低いが、この時期に雄が冬羽となっていた場合には換羽直後であり、体上面に明瞭な鱗模様があるはずである (Clement & Hathway 2000)。本個体はこの年生まれの幼鳥ではなく、頭部から上背にかけて淡青色を欠き、また体上面にも明瞭な鱗模様を欠くことから雌と判断できる。さらに、本個体の上背の中央部に不明瞭な白っぽい淡色部が見えることは、Shirihai & Svensson (2018) の雌の春の羽衣の記述にある「極めて摩耗した成鳥に限り背が淡いことがある」「オフホワイトまたはパフ白色で、純白であることは決してない」(p.274) と符合し、春の換羽から時間が経過して、摩耗が進んだ雌という判断を裏付けるものと考えられた。

上記のような判断について、今回参照したいくつかの図鑑等の著者であり、ヨーロッパのスズメ目鳥類の種同定と性別年齢査定について経験豊富な Lars Svensson 氏に問い合わせたところ、氏から、本個体は、コシジロイソヒヨドリであり、7 月 2 日という観察時期と考え合わせると、雌の成鳥であるという回答を受けた。

以下、識別に注意を要する種について検討する。「日本鳥類目録改訂第 7 版」(日本鳥学会 2012) には、イソヒヨドリ属 *Monticola* に属する日本産鳥類としてイソヒヨドリ *M. solitarius* とヒメイソヒヨ *M. gularis* が掲載されている。このうちイソヒヨドリの成鳥雄は頭から胸、背、腰が青藍色であり除外できる。イソヒヨドリのメスまたは幼鳥は本個体と一見類似するが、イソヒヨドリの全長は 25.5 cm であり、体が相当大きいほか、体下面ほか全体が暗色で黒っぽ

いこと、尾が比較の上で長いことが異なる (高野 2015, Clement & Hathway 2000)。さらに、イソヒヨドリのメスや幼鳥は上尾筒と尾が全体に暗色で、本個体のようにたたんだ尾羽の外側が橙色、中央寄りが黒いパターンをなさないの除外できる (高野 2015)。またヒメイソヒヨの雄は齢により多い少ないはあるが、頭部と小雨覆にコバルト色の羽毛があり、内側次列風切の基部の白色がたたんだ翼で目立つ白色斑となって見えるなどの点から除外できる (高野 2015)。ヒメイソヒヨのメスは本個体と一見類似し、全長が 18.5cm で大きさも近いが、尾が褐色で、本個体のような外側が橙色で中央寄りが黒いパターンをなさないの除外できる (高野 2015)。

イソヒヨドリ属 *Monticola* は旧世界に分布するが、このうちアフリカとマダガスカルには上尾筒と外側尾羽が橙色、中央寄りの尾羽が黒いパターンをなす点でコシジロイソヒヨドリに類似する種が複数分布する。Clement & Hathway (2000) によれば、これらは、コイソヒヨ *M. rufocinereus*, Forest Rock-Thrush *M. sharpei* (和名なし), ベンソンイソヒヨドリ *M. bensoni*, カワリツグミヒタキ *M. imerinus*, ルリガシライソヒヨ *M. rupestris*, シロガシライソヒヨ *M. brevipes*, コシアカイソヒヨ *M. explorator*, ホシイソヒヨ *M. angolensis* である (ここでは、世界のイソヒヨドリ属を網羅的に図示し、形態と羽色の詳細な記述を掲載している Clement & Hathway (2000) に沿って検討する。IOC World Bird List (v. 13.1; オンライン) は、上記のベンソンイソヒヨドリ *M. bensoni* を Forest Rock-Thrush *M. sharpei* に含めるとともに、Amber Mountain Rock Thrush *M. erythronotus* を Forest Rock Thrush から分けて独立種としているが、この分類の相違は、亜種を種に、あるいは種を亜種にする変更が行なわれているだ

表 1. 日本におけるコシジロイソヒヨドリの記録

Table 1. Records of the Common Rock Thrush *Monticola saxatilis* from Japan.

| No. | 観察日<br>Date | 観察地<br>Locality                                        | 標高<br>Altitude | 個体数<br>Number of<br>individuals | 年齢性別<br>Sex & age | 写真<br>Presence of<br>photographic<br>evidence | 出典<br>References                           | 備考<br>Remarks                              |
|-----|-------------|--------------------------------------------------------|----------------|---------------------------------|-------------------|-----------------------------------------------|--------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 1   | 29/5/1982   | 静岡県周智郡春野町                                              | 800m           | 1                               | 成鳥雄               | ○                                             | 川田(1982a, b),<br>五百沢ら 2000),<br>川路ら (2002) |                                            |
|     |             | Haruno cho, Shuchigun, Shizuoka Pref.                  |                |                                 | Adult male        |                                               |                                            |                                            |
| 2   | 20/9/1997   | 沖縄県西表島上原                                               | -              | 1                               | 雄                 | ×                                             | 池長ら (2014) に引用された嵩原建二氏の私信                  | 上原の最高峰は 144m                               |
|     |             | Uehara, Iriomote I., Okinawa Pref.                     |                |                                 | Male              |                                               |                                            | Altitude unknown, but 144m at the highest. |
| 3   | 19/5/2015   | 対馬市厳原町与良内院                                             | 19m            | 1                               | 第一回夏羽雄            | ○                                             | 日高ら (2017)                                 |                                            |
|     |             | Yoranaian, Izuhara Machi, Tsushima Is., Nagasaki Pref. |                |                                 | Adult 1st summer  |                                               |                                            |                                            |
| 4   | 2/7/2020    | 長野県諏訪市四賀                                               | 1645m          | 1                               | 成鳥雌               | ○                                             | 本研究<br>Present study                       |                                            |
|     |             | Shiga, Suwa Shi, Nagano Pref.                          |                |                                 | Adult female      |                                               |                                            |                                            |

けで, Clement & Hathway (2000) 以降, イソヒヨドリ属において新たに識別可能な地域個体群が発見されているわけではないので, いずれの分類を採用するかは下記の検討に影響しない).

ここにあげた種の成鳥雄は, いずれも頭部が灰色または青灰色で, 腹部に濃淡や範囲はまちまちであるものの広範囲に橙色部分があり, 本個体の特徴と合致しない. 成鳥雌も Forest Rock-Thrush, ベンソンイソヒヨドリ, カワリツグミヒタキ, シロガシライソヒヨ, コシアカイソヒヨは体の下面に横斑がなく多少とも縦斑があり, コイソヒヨは縦斑も横斑もなく除外できる. ルリガシライソヒヨは胸から腹に横斑が広くあるが, 地色が明瞭な橙色であることが異なり除外できる. ホシイソヒヨは胸から脇に横斑があるが, 胸の地色が橙色であるほか, 大雨覆, 次列風切, 三列風切, 尾羽等に暗色の細かい斑点があることから除外できる. これらの

種の幼鳥は, ルリガシライソヒヨを除き, 体の上面および下面に暗色の横斑あるいは, 鱗状の暗色斑を散布しており, コシジロイソヒヨドリの幼鳥あるいは, 換羽直後の成鳥雌と類似した特徴を持つ. しかし, 本個体はすでに検討したように, 頭頂から体上面に鱗模様などの斑を欠き, この羽毛の摩耗状況から成鳥と判断されるので, アフリカ産の近縁種の幼鳥である可能性は除外できる. これらの種はこのように羽色からも除外できるが, 地理的にも日本への飛来の可能性はほとんどないと考えられる.

これらの検討から, 今回観察された個体は, コシジロイソヒヨドリの成鳥雌と判断された.

これまで文献上に見られる本種の記録状況を表 1 にまとめた. 「日本鳥類目録改訂第 7 版」(日本鳥学会 2012) の時点では, 日本から知られていた本種の唯一の記録は 1982 年 5 月の静岡県での記録 (No.1; 川田 1982a, b, 五百沢ほか 2000, 川路ほか 2002) であったが, 自然分布

への疑問から「検討中の種・亜種」の掲載種となっていた（池長ほか 2012）。その後、1997 年 9 月 20 日に沖縄県西表島上原での雄一羽の、写真を伴わない観察情報が公表されたのと（No. 2; 池長ほか 2014）さらに、2015 年 5 月に対馬で雄が観察撮影された（No. 3; 日高ほか 2017）。No. 4 は本研究の記録である。

迷鳥は一般に渡り性の鳥類が渡りの時期に渡来する例が多い（Newton 2008, p.274）。今回の記録時期は本種の繁殖期に当たり、迷鳥の渡来時期として例外的と考えられる。しかし、本個体の外見からは、嘴の先端や爪の異常な伸長、趾の肥大、羽毛の汚れや乱れ、特に、風切や尾羽の異常な摩耗などの、飼育下に一定期間おかれるとみられるような形態の特徴は観察されなかった。また、観察地は、住宅の密集した市街地、交通量の多い道路や、港湾や空港などの、飼育下から逸出した鳥類が観察される可能性の高い場所に近接していない。

Clement & Hathway (2000) によれば、本種の繁殖期の生息地の標高は、通常、600m を越え、大部分が 1500 ~ 2700m で、アフガニスタンのような場所では 3000m の高さまで達することがある。また生息環境は、乾燥し、岩があつたり、石がごろごろしたような、草原やがれ場、岩場、小溪谷などで、通常いくらかの丈の低いあるいは矮性の植生をとまなう。

本研究も含めた日本での 4 例の記録のうち、本研究（No.4）のほか、静岡県（No.1）も 5 月 29 日の観察であり、繁殖期に差しかかった時期の記録といえる。今回の記録は標高 1,645 m であり、静岡県（No.1）も 800 m と標高が高い。一方、渡りの時期と判断される、No. 2（西表島、9 月 20 日）と No.3（対馬、5 月 19 日）の記録地面は低標高である。No. 2 の西表島の記録は標高の記述はないが、観察された西表島上原は、地図の読みから、最高でも

144 m である。No. 3 の対馬の記録は標高 19 m と記録されている。

生息環境については、本研究の個体は草原で観察され、静岡県の記録（No.1）は、「ブナやツガなどの天然林とスギ、ヒノキ造林地が山を被い、岩場やガレ場が点在している」（川田 1982a）環境でのものであったことが記録されている。今回の個体（No.4）ならびに No.1 の記録の高い標高と生息環境は、本種の繁殖期の生態と矛盾しないと考えられる。

本種の繁殖地で日本に近いのは、繁殖分布の東端にあたるモンゴル、中国内モンゴル、河北省北部であり（鄭ほか 1995, MacKinnon & Phillips 2000）、内モンゴルの東側に接する東北地方南部の大興安嶺南部も含めている文献もある（Clement & Hathway 2000, de Schauensee 1984, Vaurie 1959）。このように繁殖分布は日本とやや距離が離れているが、本来の渡り経路との位置関係などを考慮すると、オーバーシューティング（overshooting）という現象という捉え方ができる可能性がある。オーバーシューティングは渡り性鳥類が、通常の渡りの方向を保ったまま通常の分布地を通り過ぎて移動してしまう現象で、ヨーロッパでは春の渡りで観察されることが多い（Newton 2008, p. 281）。本種の繁殖地の最東端の個体群は、アフリカの越冬地から中国北部の繁殖地まで長距離渡りを行っている。この繁殖地から日本までの移動は、方角的にはアフリカの越冬地から繁殖地までの移動のおおむね延長線上にあることと、本来の移動距離に比べれば繁殖地から日本までの移動距離は相対的に短いことを考慮し、また、本種は晩春のオーバーシューティングの例として、スコットランド、ノルウェー、スウェーデンその他の中北ヨーロッパでの記録があることが知られている（Clement & Hathway 2000）ことを考え合わせると、今回

の記録も本種の繁殖地の最東端の個体群からのオーバーシュート例として考えてもよいのかもしれない。

上記のように本個体には飼育されていたことを示唆する形態的な特徴が認められないこと、観察地が飼育下から逸出した個体が観察される可能性の高い場所と言えないこと、生息環境が当該の種の本来の生息環境に合致していること、さらにオーバーシュートの可能性を総合的に判断すると、本個体の記録を自然分布と判断することは妥当であるとする。

今後、さらに観察記録が蓄積されれば本種の生息状況がいつそう明らかになるものと期待できる。

終わりに、同定についてご助言いただいた、Lars Svensson 氏、日本野鳥の会岐阜代表伊藤恭博氏、同会顧問大塚之稔氏、山階鳥類研究所の所員の皆様、特に、尾崎清明副所長、英文についてアドバイスいただいた Desmond Allen 氏、さらに論文全体にわたり有益なコメントをいただいた匿名の査読者のおふたりに厚くお礼申しあげる。本研究の一部は平岡の、山階鳥類研究所広報担当の問い合わせ対応業務として行われた。

## 引用文献

- Clement, P. & Hathway, R. 2000. Thrushes. Christopher Helm, London.
- Cramp, S. 1988. The Birds of the Western Palearctic. Vol. 5. Oxford University Press, Oxford.
- de Schauensee, M. 1984. The Birds of China. Oxford University Press, Oxford.
- Dickinson, E. C. & Christidis, L. eds. 2014. The Howard and Moore Complete Checklist of the Birds of the World. 4th ed. Vol. 2. Aves Press, Eastbourne, UK.
- Gill, F., Donsker, D. & Rasmussen, P. (eds). 2023. IOC World Bird List (v. 13.1). Doi 10.14344/IOC.ML.13.1. <http://www.worldbirdnames.org/> accessed on 7 February, 2023.
- 日高章雄・日高幸子・西剛・田仲謙介. 2017. 長崎県対馬におけるコシジロイソヒヨドリ *Monticola saxatilis* の観察記録. 日本鳥学会誌, 66(1): 53-55.
- 堀田昌伸・尾関雅章・大塚孝一・須賀聡. 2006. 霧ヶ峰八島ヶ原湿原周辺の草索性鳥類相の変遷—1961～1963年と2004年の比較. 長野県環境保全研究所. 霧ヶ峰における自然環境の保全と再生に関する調査研究(平成16～17年度). pp. 47-52. 長野県環境保全研究所, 長野.
- 池長裕史・川上和人・柳澤紀夫. 2012. 検討種の取り扱いについて. 日鳥学誌 61: 158-176.
- 池長裕史・川上和人・柳澤紀夫. 2014. 日本鳥類目録改訂第7版で「検討中」とした種および亜種について. 日鳥学誌 63: 134-149.
- 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸. 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版, 東京.
- 川田隆. 1982a. 本邦初記録!! コシジロイソヒヨ. 野鳥 47(10): 4.
- 川田隆. 1982b. コシジロイソヒヨの日本初記録について. Strix 1: 122-123.
- 川路則友・平岡考・梶田学・浦野栄一郎・柳澤紀夫・西海功・金井裕・池長裕史・亀谷辰朗. 2002. 日本産鳥類記録リスト(1). 日鳥学誌. 51(2):134-137.
- 霧ヶ峰自然保護センター. 2021. 霧ヶ峰の自然地形・湿原・気象・歴史. <<https://www.kirigamine-vc.jp/nature/environment>> 参照 2022年10月10日.
- 小林桂助. 1983. 原色日本鳥類図鑑. 新訂増補版. 保育社, 大阪.
- MacKinnon, J. & Phillipps, K. 2000. A Field Guide to the Birds of China. Oxford University Press, Oxford.
- Mayr, E. & Paynter, Jr. R. A., eds. 1964. Checklist of Birds of the World. Vol. X. Museum of Comparative Zoology, Cambridge, Massachusetts.
- 長野県環境保全研究所. 2006. 霧ヶ峰における自然

- 環境の保全と再生に関する調査研究(平成16～17年度). 長野県環境保全研究所, 長野.
- Newton, I. 2008. The Migration Ecology of Birds. Elsevier, London.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 日本鳥学会目録編集委員会. 2021. 日本鳥類目録改訂に向けた第一回パブリックコメント. <[https://ornithology.jp/iinkai/mokuroku/docs/abc1\\_20210218.pdf](https://ornithology.jp/iinkai/mokuroku/docs/abc1_20210218.pdf)>
- Shirihai, H. & Svensson, L. 2018. Handbook of Western Palearctic Birds: Vol. 1. Passerines: Larks to Warblers. Helm, London.
- Svensson, L., Mullarney, K., & Zetterström, D. 2009. Collins Bird Guide. 2nd. Ed. Harper Collins, London.
- Svensson, L. (村田健(訳)) 2011. ヨーロッパ産スズメ目の識別ガイド. 文一総合出版, 東京.
- 高野伸二. 2015. フィールドガイド日本の野鳥. 増補改訂新版. 日本野鳥の会, 東京.
- Vaurie, C. 1959. The Birds of the Palearctic Fauna. Order Passeriformes. H. F. & G. Witherby, Ltd., London.
- 鄭作新・竜澤虞・盧汰春.(編著) 1995. 中国動物志. 鵲科鵲亜科. 科学出版社, 北京.

**The third photographic record from Japan of the Common Rock Thrush  
*Monticola saxatilis*, which is the first female record**

Takashi Hiraoka<sup>1,\*</sup>, Mariko Nagai<sup>2</sup> & Jiro Nagai<sup>2</sup>

1. Yamashina Institute for Ornithology Konoyama, 115, Abiko, Chiba, 270-1145, Japan.
2. Unumahigashimachi, Kagamihara, Gifu, 509-0126, Japan.

On 2 July 2020, an adult female Rock Thrush was observed and photographed at Kirigamine Plateau, Nagano Prefecture, central Japan. The bird showed no signs of captivity, such as unusually abraded or stained feathers or elongated bill or claws. Whereas escapees are expected to occur in human habitats such as large residential areas, seaports, airports, and large roads, the environment and the elevation of the observation fit the typical habitat of this species. These facts and the occurrence of the bird in summer may suggest its natural origin as an example of the spring overshooting of a long-distance migrant. It constitutes the third record of this species from Japan and also the first record of the female with photographic evidence.

**Keywords:** Common Rock Thrush, *Monticola saxatilis*, straggling record, Kirigamine Plateau, Nagano Prefecture, the first female record for Japan.

\*: [hiraoka@yamashina.or.jp](mailto:hiraoka@yamashina.or.jp)